

(端裏書)

「ひかく」

乍恐奉願口上之覚

一 私祖父九右衛門儀寛保年中江府江相詰

罷在候砌、乍恐上野

上野御殿御立入奉願上候所御聴届之上

宮様御目見等被為

仰附冥加至極難有仕合奉存候、其上

御公儀江願之筋猶米子御城主江被為添

御内意被為下候旁ニ付於当所小某節より

(見消言葉)

格別蒙御国命累代無為家相続仕候、御厚恩之

御由緒ニ付祖父江府滞留中八ヶ年之間

年頭

御目見被為仰附献上物等仕候、同人帰国

已後茂毎歳不怠年頭為御礼折紙扇子

奉献上之、則御坊官万里小路民部卿様迄

御披露書指上来候、然処宝曆之末祖父

(年中年中)

死去亡父義ハ從來多病之者ニ罷在候而

右年頭勤方等茂相怠甚以奉恐入候

併御厚恩之程曾以不奉忘却候得共

中絶仕候段、重々奉恐入候、依之右御由緒

之筋粗申上候通、乍恐上野

上野御殿御旧記御調御願被為下今般

私より差上候別紙記録之通御用記ニ相頭

居候得者何卒先祖如有来年頭御祝儀

献上仕度兼而懇願ニ罷在候、何卒出格之

御仁恵を以此段厚御吹挙御執成之程

偏ニ宜敷被仰上可被為下候様、幾重ニも奉願上候、以上

伯州米子

大谷新九郎

文化十二年亥二月日

大山御本坊

御役所